

2. 事業の概要と成果	
(1) 上位目標の達成度	栽培が久しく途絶えていた伝統地元野菜栽培が復活し、103戸で栽培を始めた。配布した鶏は順調に増え、2年経った3村では3割の世帯にいきわたり食用にも廻され始めた。この結果、ビタミンやタンパクを摂取し、家計の出費が削減され、住民の食糧保全及び生活の安定に寄与することができた。
(2) 事業内容	<p>統合農法の普及を図るとともに、それを定着させ他村への波及を図るための人材を育成するため、以下を対象にしたトレーニングを実施した。</p> <p><u>1. モデル農民トレーニングについて。</u> 活動開始初期においてモデル農民を決定し、それぞれの土地利用計画を立て、前半は技術トレーニングを中心に、6月以降は5村に相互訪問しながらプレゼンテーション力を養い、10月の5村合同成果発表セミナーで発表を行なうことで統合農法指導者を養成した。</p> <p><u>2. 1年目にトレーニングを実施した3村に対するフォローアップや実践指導、及び、新規の2村へのトレーニングについて。</u> クロスビジット(相互視察)を5村合同で2度行い、統合農法、コーヒー栽培、新しい樹種の育樹法、チェックダム(小型堰)の効果的な建造法を学ぶ。 チェックダムについては、過去の建造物を視察調査して水源管理法を学習し、3段工法による堰の実践指導を行なう。養魚は溜池づくりから、養鶏は鶏舎づくりと抗生物質の使い方指導から主に4月から5月にかけて実践指導を行なう。種銀行と婦人会のトレーニングは予定より回数を増やして、伝統種や貴重種の保存や普及を行なう。婦人会では、栄養や食物の保存について話し合い、加工食品や保存食品づくりに発展している。コーヒーについては、果実の実を剥いて豆にする付加価値化、苗床づくり、植樹、また、コーヒー以外の樹種として初めてピンロウジュ椰子の植樹を行なった。</p>
(3) 達成された成果	<p><u>1. モデル農民について</u> 当初20人を予定したモデル農民は、各村4から6人の意欲的な農民をモデルとして選抜したところ5村合計26人(他に2つの学校も指導)にモデル農トレーニングを行なった結果、そのうち25人は統合農法の農地を持ち溜池を造成して魚を飼うことができた。統合農法農地は徐々に増えていき、逆に、それまで広がった化学肥料による換金作物農地は減っており、モデル農民の農地においては10月現在の両者の面積はほぼ同等になった。また、モデル農民は最後の成果発表セミナーにおいてプレゼンテーションをして今後の指導力を高めた。</p> <p><u>2. 200名の村人へのトレーニング</u> 5村合計で64人が有機堆肥作りを始め、103人がそれぞれ10から20種の伝統的地元野菜の栽培を始めた。</p> <p><u>3. 養鶏・養魚について</u> 養鶏は、第2期目の2村には30世帯に約120羽を配布して数は2倍に増えているが、まだ他の世帯に分配はしていない。第1期の3</p>

	<p>村の 24 世帯に 110 羽を配布した鶏は 2 年経って 3 倍に増えたので、増えた分から新たに 81 世帯に分配することができた。その結果、養鶏を営む農家は全戸のうち 31%に達した。また、増えた分の一部 170 羽は食用に廻すことができ、定期的に鶏肉を食することができるようになった。今のところはまだ販売していないが、肉の購入費を削減できた分の経済効果は認められる。</p> <p>養魚については、5 村合計で 70 世帯、86 の池を掘って、3 万尾余りの魚(2 種)を飼育した。世帯目標の 60 は上回ったが、戸数に占める割合はまだ 15%であり、数を増やして他家や他村へ分配したい。</p> <p><u>4. コーヒーの収穫、販売</u></p> <p>今期の開始早々にコーヒー果実の赤い果肉を剥いて殻付き豆(ガラー)にするための機械を導入して、付加価値化プロジェクトをファイコーンセンターで開始した。2011 年 12 月に収穫・集荷したコーヒー果実は約 900kg で、予測量 2 t の約半分という結果だったが、殻付き豆(ガラー)の販売額は 22,500 バツ(180kg×125 バツ)になった。もし果実で販売した場合、13,500 バツ(900kg×15 バツ)にしかないなので、機械を導入したことで 9,000 バツ(67%)の増収となった。</p> <p>コーヒーを栽培する農民は 4 村で 19 人、今期は 7,150 本を植樹した。また、結実しているコーヒーの木は 2,470 本あり、1 本 1kg の果実が収穫できると仮定すれば 2012 年 12 月の収穫量は 2,470kg と想定できる。価格を前年と同じとすると、果実では 37,050 バツ(2,470kg×15 バツ)、殻付き豆(ガラー)では 61,750 バツ(2,470÷5×125 バツ)となる。19 人のメンバーはファイコーンセンターの機械で殻付き豆(ガラー)にする予定である。(1 バツ≒2.5 円)</p> <p>コーヒー以外には、柿などの果樹とビンロウジュ椰子を 8 月に植林した。初めての樹種としてクロスビジット(視察)で学習したビンロウジュ椰子を導入した。</p>
(4) 持続発展性	<ol style="list-style-type: none"> 2 年間で 26 人養成したモデル農民達が互いに連携して、自村及び他村にて村人を指導する。特に、化学肥料の適切な使用方法の指導によって、使用料削減に期待がもてる。 養鶏においては 2 期目に配布した 2 村において増数が見込まれ、他家への分配が始まる。養鶏は女性達が飼育していることから、養鶏による婦人会ネットワークが形成され婦人の活動が活発になる。養魚についても養魚池作りと養魚の分配が始まり、えさの管理などを通じてネットワークが形成される。 婦人達においては、菜園での伝統野菜栽培を通じて食物の安全や保障、栄養について学ぶことで婦人会活動が活発になり、タンパクやビタミンの補給が改善されていくことに繋がる。 ファイコーンセンターに導入したコーヒー皮むき機械で豆にして販売することによって果実で販売するより大体 67%収入が増える。今期植樹したコーヒーは 3 年後に結実するので、毎年の植樹によってコーヒー豆の販売額が増加していく。そのためにも、北部タイの他県のコーヒー産地と情報共有することで、技術革新や販路の

	<p>開拓に努めていく方向にある。</p> <p>5. 現在 5 村での活動を 10 村のネットワーク活動としてメーハット川流域全体に広げていく。そのためには、現在活動中の村への視察交流を通じて新村の村長などを中心に村人のモチベーションをあげていく。</p> <p>6. 各村の環境委員会が主体となって活動し、提携団体である現地 NGO がサポートしていく。</p>
--	---